

## 「交通事故にあわないとために」

土成小学校 四年 増田 陽太

「ウー」パトカーがサイレンをならして走って行くのを見るたび、ぼくはあの夏の日のことを思い出す。

あの日ぼくは、おばあちゃんとおじさんが運転する車に乗った。お母さんは、あとから別の車を一人で運転して、ぼくが乗った車の後をついて来ていた。しかし、ぼくが家についてしばらくしても、お母さんは帰つてこなかつた。どうしたのかなと思つて帰つてくる方向を見ていたとき、おばあちゃんのけいたい電話がなつた。お母さんからだつた。「事故を見ていたとき、おばあちゃんのけいたい電話がなつた。お母さんからだつた。」「事故した。おじいさんの運転する車が飛び出して來た。」ぼくは、お母さんが心配で、むねがどきどきした。「早くお母さんの所に行きたい。」と言うと、おばあちゃんは、「事故した場所はどこ?」とたずねた。家のすぐ近くだつた。いそいで行くと、お母さんの車はぐちやぐちやになつっていた。お母さんは頭をおさえていた。ぼくはなみだが止まらなかつた。けいさつが来て、交通整理をしたり、事故がどのようにしておこつたかくわしくいたりしていた。相手のおじいさんの車もぐちやぐちやになつっていた。おじいさんは首やむねがいたいと言つていた。事故の原因は、おじいさんがナビを見ながら運転していて、止まれの標しきを見落として止まらずに、そのままのスピードで交差点に入つたことだつた。ぼくは、いらいらした気持ちをおさえることができず、おじいさんに、「標しきを見て止まつていたら事故はおこらなかつたのではないか。」と言つた。おじいさんは、「すまん」と頭をさげた。

ぼくは、交通事故のこわさを知つた。だから、パトカーがサイレンを鳴らして走るのを見たびに、どこかでだれかがをしていいなか心配になる。新聞やテレビで毎日のように事故のニュースを見るが、どうしたら事故がおこらないかと家族みんなで話し合つた。おじいちゃんは、「車を運転する大人も気をつけなければいけないけど、子どもも気をつけな事故につながるよ。」と言つた。お母さんは、道路を歩くときは、右がわを一列で歩き車道から少しはなれた場所を歩くようにする、道路をわたるときは飛び出しはぜつたいにしないようにして、左右をかならずかくにんし横だん歩道をわたるように、と言つた。ぼくは、自転車に乗るときは、かならずヘルメットをかぶり、あごひもをしっかりとつかりすると言つた。

朝、笑顔で「いってらっしゃい」と見おくつてくれる家族にぼくは、「いってきます」と言つてでかける。夕方ぼくが、「ただいま」と帰ると「おかえり」とあたたかくむかえてくれる。こんな幸せな日が毎日つづくよう交通ルールを守り交通事故にあわないように気をつけたい。